

来春まで
開講中

中大文学部が読売新聞と共催で市民公開リレー講座

「恋愛 家族 そして未来」

60年代のキズを 70年代アメリカン・ポップスが癒した

4・23 第①回は中尾秀博教授が音楽と映像で楽しく

土曜の午後、3115教室は超満員の熱気があふれていた。ジャクソン・ファイブのノリのいいメロデーとダンスが響き渡る。続いてカーペンターズのしっとりとしたバラード、映画「サタデー・ナイト・フィーバー」からは、スタイルがよかった頃のジョン・トラボルタがビージャズの音楽で切れのある踊りを見せる。流れる曲、流れる曲が耳にしたことのあるナンバーだ。思わず体が動きだす——50代の主婦たちの背がリズムカルに揺れていた。

文学部13専攻そろい踏み

楽しい講座がはじまった。中央大文学部は来年度から従来の5学科を「人文社会学科」1学科に統合し、その中に13専攻が置かれる。学科の壁を取り払い、専攻分野の横断性をより高める再編である。それを前にして、読売新聞立川支局との共催で実現した市民公開講座。講座は、「恋愛 家族 そして未来」をテーマに

掲げ、13専攻からひとりずつ教授や助教授が登場する。この4月から来年3月まで1年間にわたるロングランの講義だ。講座内容も、恋愛論から家族問題、村上春樹までと多種多様な市民のみなさんにまじって受講した。

70年代世代との遠近感

4月23日、第1回目のテーマは「1

970年代

アメリカ

ン・ポップ

スの場合」。

さつそうと

壇上へ姿を

見せたのは、



中尾秀博教授

うか。学部生のほとんどは80年代・バブル期の生まれで、「ファミコン・デイズニールランド・アイドル育ち」である。父の若かりし日の写真に「長髪パーマ、ピタピタの洋服、に厚底のブーツ」というのがあったが、あれは70年代風か？ いや60年代かな……？ ぼんやりと遠くに霞んでいる。

そんな世代間ギャップを埋めるために、講義はまず各時代の特徴や違いからである。

60年代といえ

文学部英米文学専攻の中尾秀博教授。教室は500人の超満員だ。青春期が重なる70年代世代——団塊の世代などの年輩者も多かった。

私たち学生になると、いったいどれほどが、70年代のポップ・カルチャーと、その前の60年代、そのあとの80年代の違いを説明できるだろ

ば、アメリカは若者のカウンター・カルチャーの全盛期、家族のまわりは薄れ、荒れ果てた時代といわれている。そして80年代は、レーガン大統領が就任し冷戦が終結した。保守的で強いアメリカが強調された時代だ。その象徴的な時代に挟まれた70年代という時代は印象が薄

く、研究者の間でも「It seemed like nothing happened」（まるで何事もなかったような）と評されることが多いのだという。

70年代は何事もなかった？

J・ファイブ、カーペンターズ：

「本当に70年代何事もなかったの

だろうか？ 70年代にビルボードの1位になった音楽を観察していると、どの時代にもない70年代の特徴が顕著に見られるのです」

中尾教授の講義はふだんも映像と音楽を多用することが多いのだそうだが、今回の講義でもそのサービス精神が、聴講生の目と耳をグイと引

日程	学科・専攻・コース名	担当者	タイトル
4月23日(土)	文学科 英米文学専攻	中尾秀博 教授	「恋愛 家族 そして未来」～1970年代アメリカン・ポップスの場合
5月28日(土)	社会学科 社会情報学コース	松田美佐 助教授	ケータイでつながる家族
6月18日(土)	史学科 西洋史学専攻	杉崎泰一郎 教授	愛～12世紀の発明、21世紀の宿題
7月23日(土)	教育学科 心理学コース	横湯園子 教授	暴力の悪循環を断つ、そして回復・癒しへの道
8月27日(土)	哲学科	中村昇 教授	恋愛なんてありえない！
9月24日(土)	文学科 国文学専攻	宇佐美毅 教授	村上春樹——喪失の時代／恋愛の孤独
10月15日(土)	史学科 東洋史学専攻	松田俊道 教授	イスラム社会の恋愛と家族
10月29日(土)	文学科 中国言語文化専攻	榎本泰子 助教授	中国の父親像と家族愛
11月19日(土)	史学科 日本史学専攻	坂田聡 教授	家族の歴史を探る～家族の過去・現在・そして未来
12月17日(土)	文学科 仏文学専攻	斉木眞一 教授	フランス小説にみる恋愛のかたち—ブランド、ベット、妻の座
1月28日(土)	社会学科 社会学コース	矢島正見 教授	今日の青少年の性意識
2月25日(土)	文学科 独文学専攻	野口薫 教授	家族の将来像を尋ねて—ドイツの場合
3月18日(土)	教育学科 教育学コース	古賀正義 教授	自分探しをする若者たち：青少年問題のいま

きつけたよ
うだ。
論より映
像——最初
にスクリー
ンに映し出
された映画
は、ポール・
ニューマ
ン、ロバ
ート・レッ
ドフォード
主演、69年
公開の「明
日に向かっ
て撃て！」。

あてもなく逃げ回る強盗と恋人。そこには、「家庭から飛び出しあてのない、大人になりたくない60年代の若者」が象徴されているという。そんな60年代若者映画の主題歌は、
「Rain Drop Fallin' On My Head」と始まる、有名な「雨に濡れても」。

「この曲はビルボード1970年代の一番はじめのトップワンを飾りました。これは60年代と70年代の過渡期をまさに象徴しているのではないのでしょうか」

大教室には次々と70年代にナンバーワンに輝いたヒットソングが響き渡った。ジャクソン・ファイブ、カーペンターズの名曲「遙かなる影」。パートリッジ・ファミリーやオズモンズもトップチャートの常連であった。さて、彼らに共通する特徴とはなにか？ それは、「家族」だ。70年代、兄弟や家族で構成されたグループがラブ・ソングを歌い、その人気も顕著であったという。

「家族の絆」とジュリエッタ

照明を落とした大教室に、70年代スターの映像と音楽が流れ、教室は一気に70年代へ。わたしも楽しんで聞いていたが、ふと近くの席に座る、70年代若者だった親世代のおじさんおばさんに目をやると、こちらもノリノリという感じで身を乗り出して、めがねをかばんから取り出してじっくり映像に見入っていて、みな楽しんでる様子がかげえた。

家族で構成されてはいないものの、70年代に爆発的な人気を博したグループがビージーズであった。1位となった曲だけでも37週もの間、70年代のチャートを独占した。そのビージーズの曲が全編に散りばめられ、大ヒットした映画がジョン・トラボルタ主演、「サタデー・ナイト・フィーバー」だ。軽快なリズムと、どこから声を出しているの？と思うほど甲高い歌声のビージーズに合わせ、トラボルタ演じるトニーがディ



“70年代世代”には「よみがえる青春」……。

スコキングとしてそれはもうかっ
こよく踊る。アメリカ中にディスコ
ブームをもたらした大ヒットとなつた
この映画もまた、60年代の若者像そ
のままのその日暮らしのトニーが運
命の女性と出会い、自分を見つめな
おし、家族を持ちたいと思うまでに
なるといった、「家族」を感じさせ
るものなのだ。

なぜ70年代のそこかしこに「家
族」を感じさせるテーマがあるのだ
ろう？ 中尾教授はこう話した。

「60年代、若者は家を飛び出し
べてのものの反対し、荒れ果てた。

その結果人々のこころも病み、70
年代アメリカはNYの25時間大停電
や79年の米国大使館人質事件など多
くの事件や騒動に見舞われた。60年

代の後遺症です。それ
を癒そうと政府はタバ
コの制限やゴールデン
タイムのTV放送内容
の規制など様々などを
行つたけれど、一方で
70年代のヒットチャー
ト上にも、崩壊してし
まった60年代の家族を
修復する家族の絆や価
値観を感じさせるよう
な動きがヒットチャー
トにも見られたので
す」

それは「80年代、強

いアメリカを象徴するレーガン政権
が謳つた（ファミリー・バリュー）
（家族の重要性）のさきがけだった
ようにも見えます」と続けた。

70年代米国に似る日本

中尾教授はまた、「この頃、アメ
リカに起こつたことと、現在の日本
が呼応する状況がある」とも語つた。
インターネットの普及による情報社
会の発達、家族の崩壊、精神の疲れ、
多発する凶悪な事件……「個の社会」

が生むさまざまな問題。場当たりの
警告やルールは発せられるが、社会
ビジョンを欠いたまま、事態が深刻
化しているのが最近の日本かもしれ
ない。

悲しい偶然か。70年代、兄弟で活
動し大人気であったカーペンターズ
のカレンは家庭問題にも原因を持つ
拒食症で亡くなり、ジャクソン・ファ
イブのマイケルも周知のような状況
で、彼らが音楽を通して見せた「家
族」の重要性とは遠い現実が皮肉で

ある。

講義は中尾教授の興味深い講義の
展開と音楽と映像のみずみずしさに
よつて教室全体が引き込まれ、講義
後はあちこちで「楽しかった」とい
う声があふかれた。

講義の最後の質問コーナーでは、
「中尾先生自身の恋愛観を教えてください」という質問に会場がわいたが、
「そういうことはメールで」と、クー
ルに質問をかわされてしまった。



講座は来年3月までほぼ月1回で
行われ、参加は無料、事前申し込み
も不要だ。10回以上の参加者には修
了証も発行される。興味がある講義
だけ聴くのもいいし、文学部とは接
する機会がない学生も親しみやすい
テーマばかりなのでおすすめ。いい
席に座ろうと思つたらお早めに！
各回の講義の詳細は読売新聞多摩版
に掲載される。

（学生記者 阿部恭子）総合政策学
部4年